



227号

2017 / 10 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「ナツメを干す」 2002年秋 陕西省延川县一斗谷村。

撮影：周路

「後漢末期のある夏、魏の曹操が自分の勢力を拡大するために、自ら軍隊を率いて、張綉(後漢末の群雄の一人)と戦いました。

十分な水を持って行かなかったので、兵士たちは疲れ果て、喉が乾いていました。カラカラに乾いた土地を行軍していたので、多くの兵士たちが渇きで倒れ込んでしまい、曹操を慌てさせました。彼は斥候を出して、近くに水場を探させ、長い間待ちましたが水場はありませんでした。曹操は困りましたが、遙か前方に見える林に目をやると、良い考えが浮かびました。彼は全軍に伝令を送り、各部隊に伝えさせました：「前方に大きな梅林があるので、そこまで行けば、美味しい梅が思いっきり食べられるぞ。」言われて、兵士たちが前方を眺めやると、遙か彼方に大きな樹林の影が見えたので、たわわに実った梅の実を想像しただけで、口に唾液が湧いて来て、急に元気を取り戻し、勇んで行進したので、思ったよりずっと早く野営地へ帰りつきました。」

言葉の意味としては、「望みが実現する可能性が無い時、希望を思い描き空想して、自分を満足させることの喩え」とあります。

使用例は、「彼は家が貧しかったので、小さい時からいつも『望梅止渴』の方法で自分を満足させてきた」となっています。

日本語では、「ウメを望んで渇きをいやす」と言い、「空想で自分を慰める」と言うのだそうです。

本の使用例も日本語の解説も、諦めのニュアンスが強くて、「絵に描いた餅」と同じ雰囲気です。中国人の積極的な姿勢をよく目にするので、私は、「現在の渇き(不足)を満たしてくれる梅林を遠くに見ながら、そこへ到達しようと努力する」と言うような意味があるのではないかと、あれこれ見回しましたが、見つからず、中国の友人に問い合わせてみました。

すると彼の答えも、「使用例の通りで、日本語の『絵に描いた餅』と全く同じです」、おまけに「この言葉は実際にはあまり使われず、言葉の出所である曹操の話

だけが有名です」と言ってきました。つまり、「遠くの梅林に向かって努力する」と言う解釈は全くないのだそうです。私の独りよがりな解釈でした。

私は、中国の人達の積極性を好ましく思い、それなりに評価しているのですが、この積極性に関して、一つだけ、嫌いなことがあります。それは新幹線の輸出です。

中国が、フランスと日本から新幹線を導入したのは、高々10年程前のことでした。それが今では、アジアやアフリカの国々に、「中国の新幹線」として輸出しているのです。自由になったとは言え、本来が社会主義体制の国ですから、中国政府の当事国に対する援助と抱き合わせで、フランスや日本に競り勝って、次々と受注して居るのだそうです。

日本も、明治になってから、欧米の鉄道技術を導入しましたが、長い年月をかけて日本独自の改良を重ね、技術を進歩させて、世界でも有数の、安全で時間に正確な鉄道網を作り上げました。それに対して、中国は導入して10年そこそこ、独自の安全システムを開発したとも思えないのに、「中国の新幹線」として堂々と輸出しているのです。

今中国では、多くの都市を新幹線で結ぶ計画があり、急ピッチで建設が進んでいます。走行する列車は快速ですが、駅の施設とか旅客誘導の方法にはかなり問題があります。これら問題を解決してから、総合的な新幹線システムを売りに出した方が、中国の威信の為には良いのではないかと思います。中国の国内市場は大きいのですから。

加えて言えば、鉄道建設にも、中国人労働者が大挙して乗り込んで仕事をするので、施工当事国の労働市場には恩恵が少なく不評なのだそうです。

こんな話を聞くと、好ましく思っている中国の積極性があだになっているのではないかと思います。中国のためにとっても残念に思います。

注) 梅望：ここでの梅は楊梅(ヤマモモ)を指す。ヤマモモの実は、喉の渇きを癒やし、胃腸の働きを整える力があると言われている



Jūn zǐ duō hū zāi ?
君子多乎哉？君子は多^たならんや桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄^{うえだ あつお}

春秋時代、ある国の高官が、孔子の弟子の子貢に次のように訊ねたことがあります。

「夫子聖者與？ 何其多能也！(Fū zǐ shèng zhě yú? Hé qí duō néng yě!)(夫子は聖者か。何ぞ其れ多能なるや)」「子罕第九」。あなたの先生の孔子殿は聖人ですか。実に多能でいらっしゃいますね、と。

この問いかけには二通りの解釈があります。一つは文字通り誉め言葉。孔子は多方面の能力を持っているから、さぞかし聖人だろう、というもの。もう一つは、聖人とは常に泰然自若としているはずなのに、それにしてはいろいろな雑事に多能だな、というもの。これには少々皮肉が込められています。いずれを取るかでこの文全体の意味が微妙に変わってきますが、ここではひとまず誉め言葉にしておきます。

これを聞いた子貢は答えます。「固天縦之、將聖。又多能也！(Gù tiān zòng zhī。 Jiāng shèng。 Yòu duō néng yě!)(固に天之を縦にす。將ど聖ならん。又た多能なり)。実に天は、この宇宙の全てを自由にお決めになります。その天意をお受けになった孔子様は、ほぼ聖人と言って間違いありません。その上にまた多能でいらっしゃるのです、と。

後世の中国の人たちにとって、孔子は紛れもなく聖人でした。現代でも孔子は世界の四大聖人の一人に数えられています。しかし、孔子在世中はどうだったのでしょうか。

孔子にとって聖者とか聖人というものは、あくまで過去に実在したと伝えられる理想の支配者のことでした。従って自分のことを聖人と称するわけがありません。しかし弟子たちにとっては聖人か、あるいはそれに近い存在であったと思われます。

一方、当時の人たちにとって孔子は、思想、学術、

政治等はもちろんのこと、こまごまとした雑事に至るまで、多方面に優れた能力を持つ、有能人でした。そしてこういう有能人こそが、混迷した当時の社会に求められていました。しかし道徳上の理想があまりに高すぎて、この能力を使いこなす権力者は一人もいませんでした。あるいはこれが聖人の宿命を物語るものかもしれません。

それはともかくとして、この高官も、多能であることが理想の人物像に近いと考えていたようです。「聖者」とはこれを強調したものと思われま。しかし子貢にとっては、聖人と多能は別物です。天から最高の稟性^{ひんせい}と地位を与えられた人が聖人で、多能とは技量の面で優れた能力を持った人ということでした。多能だから聖人というのではない。孔子の偉大さはその両方を兼ね備えた点に在る、ということです。

この話を聞いた孔子は子貢に言いました。「吾少也賤，故多能鄙事。君子多乎哉？ 不多也！(Wú shào yě jiàn。 Gù duō néng bǐ shì。 Jūn zǐ duō hū zāi? Bù duō yě!)(吾少きより賤し。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや。多ならざるなり)。私は幼いころ貧乏だったから、生きるためにやむを得ず諸事に多能になっただけのこと。君子たる者、多能である必要はない、と。君子とは指導者としての人格を備えた人のことです。多能であることを自他ともに認める子貢に対して、聖人だの多能だのと言う前に、世の指導者としての人格を磨きなさいと、暗に諭しているのです。

ちなみに孔子が貧しい母子家庭の育ちであったことは、よく知られた話です。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

正門に到着した。9月号に写真を掲載したが堂々たる入り口である。中国のほとんどの観光地は、昨年行った鳳凰山もそうであったが巨大な門を造っている。まるで門自体が観光の対象になっているかのようだ。門の前方は、かなりのスペースが確保されていて観光バスが何台も停まっている。バスからはどこから来た団体か分からないが同じ色の帽子を被った人たちが降りて来る。

さて千山の最大の見どころは、「千山弥勒大仏」である。この大仏は、「大仏寺」の広い境内の一角にある。我々は軽く昼食を摂ったあと、大仏寺境内への入場券と大仏寺そばから大仏が見えるところ

まで行くロープウェイの往復乗車券を買いに正門脇の観光案内所に行った。両方で一人130元(約2千円)支払った。正門そばから大仏寺山門まで行く観光専用車が出ると言うので、それに乗り込むと無料かと思うと一人10元取られる。どこの観光地も何でもかでもお金を取られる。車に乗ると数分で「大仏寺」と扁額の掛かっている山門に到着した。こんなに近いのなら歩けばよかった、と思ってももう遅い。山門から中に入るとそこには首に観光ガイドのプレートをかけた女性が数人いて、声をかけて来る。ガイド料は100元だと言う。私はどうせ話の内容がほとんどわからないので、要らないと言ったが友人たちは支払ったので仕方なく3分の1を負担した。

大仏寺はさすがに立派な構えの寺院であった。中でも三重の塔は、日本の三重の塔のように屋根のラインがすっきりしたものでなく、ごつごつした形であるが極めて印象的である。いまだに脳裏に焼き付いている。いくつかの建物をまわった後、我々とガイドは一緒にロープウェイに乗り込んだ。これも

あっという間に着いてガイドの後に従った。坂道を少し登ると「南泉庵」の前に出た。それほど大きくないこの建物に大仏が安置されているのかと思い、中に入ったが小さな仏像や花が活けて有るだけで何も

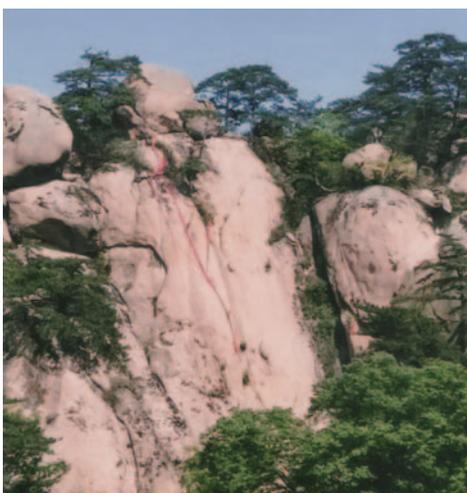
ない。どういうことかと思議に思っていると、友人がガイドから聞いた話を通訳してくれた。「寺西さん、前面の大きなガラス越しに巨大な岩が見えますが、それが大仏だそうです!!」大仏が岩であるとは夢にも思わなかった。

そうか! この庵は大仏を見るために造られたのか! 誰が考えたのか知らないがこの発想は面白い。説明を聞くと巨岩が頭部、胴体、腕や足に似ているではないか。南

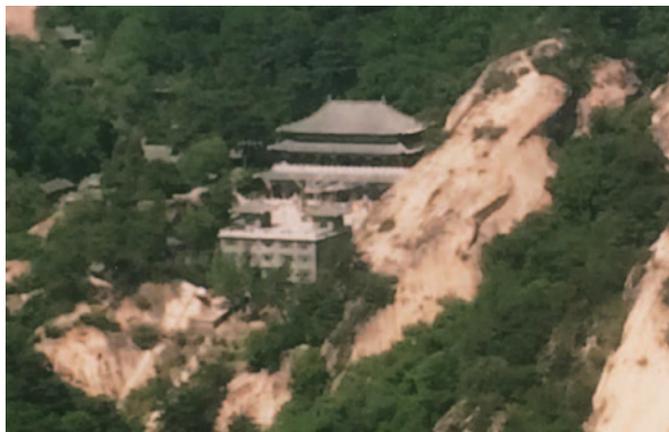
泉庵と巨石の距離は、およそ300mである。それでも岩が巨大なので近くに見える。ネットで調べると、仏陀の背丈は70m、肩幅は46m、頭は9.9×11.8mと出ている。これらの岩塊を大仏と見定めたのは中国仏教協会長の趙朴初という人物である。自ら「千山弥勒大仏」と名付け、千山を東北地方の仏教聖地としたそうだ。この大仏は1993年に開眼供養している。

ちなみに「千山弥勒大仏」と四川省の樂山大仏(高さ71m)、そして香港の天壇大仏(高さ34m)が、「中国三大巨仏」というそうだ。何でも大きいものが好きな中国らしさが現れている。東大寺の大仏は高さが14.7m、鎌倉の大仏が13mであるから如何に大きいか分かっていうものだ。

大仏寺を後にして、もう一つの有名な寺院に行くことにした。友人のMさんから以前頂いた資料に「龍泉寺」という名刹の80年前の写真があり、今も当時のままなのか確認したく友人にも写真を見せて是非行きたいと言ったのだ。場所は大仏寺のある山から



千山弥勒大仏の巨岩



龍泉寺 80年前の写真とほぼ同じだった

遠くに眺める山の中腹にある。観光車に10元払いその寺院のある山の麓まで乗った。そこからまた石段だ。かなり上るとその寺院はあった。写真にある山々に抱かれるようにして建っている龍泉寺はほぼ当時の佇まいを残していて、見比べると感慨深いものがあった。ただこの寺院も観光客が多くおしゃべりの声ばかりが響き渡り、静かに拝観できる雰囲気ではないのでお賽銭を入れ早々に退却した。999の山々にいくつの寺院があるのかは分からないが、かなりの寺院があるらしい。「千山弥勒大仏」を中心として千山全体が祈りの山のように思えた。

正門まで戻りタクシーに乗ってホテルに向かう。今日は一日中山中を巡り歩いたので流石に疲れ、早めに休み明日に備えた。

旅の3日目、5月12日の朝が来た。今日中に大連まで戻らねばならないので朝6時にタクシーを手配してある。まず朝食を、となったがまだ5時なのでホテルのレストランは閉まったままだ。友人が外にお店が出ているはずだから、というので外に出ると



本溪水洞の入口



朝早くから油条や豆乳スープを作っているおじさん

果たして中年の夫婦が中国では定番の油条(揚げパン)や豆乳のスープを作っている。まだ朝は肌寒いので二人ともしっかり着込んで作業している。5分くらい待つと出来上がったと言うので、油条(1.5元)とスープ(1.5元)にゆで卵(1元)を買う。これで4元(約64円)なので申し訳なく思いながらもおいしくいただいた。油条に熱いスープで身も心も温かくなった。

タクシーはすでに到着していて早速乗り込む。これから行くところは、本溪にある「本溪水洞」という鍾乳洞である。鍾乳洞は日本では秋吉台や阿武隈洞などいくつか見てきたが、ここ東北地方で有名な鍾乳洞はどんなものだろうと想像した。鞍山から東に約100kmの地で、8時前に着いた。水洞の入場券の販売は8時半からのようなので付近の土産物店で時間を潰した後、窓口でカート乗車券(15元)と水洞入場券(120元)を求めた。多くの観光地は少し遠くに入場券売場を作り、現地までカートに乗って行くように設計しているかのように私には思える。3人ともこの地は初めてなのでカートに乗り込むと、案の定あつと言う間に水洞の入り口に着いたので少し騙された気分になる。

水洞は国家AAAAA級(5A)旅游景区との説明版がある。そして「世界一長地下充水溶洞」と書かれている。「溶洞」とは鍾乳洞のことである。何でも世界一が好きなお国柄に閉口しつつもアンコウの口のようにポッカーと開いた入口に入る。するとそこには広い空間に広い水面が拡がり何艘ものエンジン付きの船が係留されている。洞内は寒いので船の近くに置

いてあるフード付きジャンパーを着用し船に乗り込むとまもなくエンジン音を軽やかに響かせながら水面をすべるように進んでいく。左右の天井は高く、石柱や石筍が奇妙な形で眺められる。七色の光が当てられ幻想的な世界が広がっていく。20人乗りくらいの船が何回もすれ違うのだ。かなり幅が広く水深もありそうな水路が続いていく様はさすがに素晴らしい。何でも世界一が好きだと悪態をついたが本当にそうかもしれないと思えてきた。何しろ右に左にカーブしながらなかなか折り返し点まで行きつかなないのだ。奥行がどの位との説明はなかったが、1km近く進んだ感覚である。折り返し点に来て船は反転したが、まだその先は船が行き交うほどの広さでは

なくなったが水路は続いていた。水洞と命名してあるが正に地底にできた大きな筒のようだ。流石に中国大陸は規模が大きいものだと実感した。

水洞の外に出て、入場券売り場まで歩き、そこにあるお店でカップラーメンを食べたが寒かっただけにととても美味しくいただいた。帰りはどうするのかと書いていたら友達の一人がどうやらタクシーの運転手と話している。新幹線(動車)の本溪駅まで一人20円で交渉が成立したようで、知らないお客一人と一緒に無事本溪駅に着くことが出来た。動車の路線は、丹東駅経由でそこから海沿いに大連に行くルートで多少時間がかかったが、無事夕方には大連北駅に到着した。(続く)

「漢詩の会」たより⑮

(2017年9月24日)

減字木兰花・天涯旧恨

報告：花岡風子

今日のお題は秦観(注)の〈詞〉〔減字木兰花〕〈天涯旧恨…〉でした。減字木蘭花は〈詞牌〉、即ちメロディーの名称で、この作品には固有の題名が付いていません。〈詞〉では作品名はあってもなくてもかまわないのです。そこで同じメロディーの他の作品と区別するために、出だしの文句を題名の代わりに添えることがあります。その出だしの文句が〈天涯旧恨…〉です。前号では、南唐の李煜の〈詞〉をご紹介しましたが、この秦観の作品は、宋代に特に栄えた〈宋词〉の一つです。

ているだけです。

〔減字木兰花〕とは、元になる〔木兰花〕から若干文字を減らして短縮したことからこの名が付いています。

作者の秦観(1049～1100年)は北宋の詩人でした。蘇東坡の名で知られる蘇軾の弟子で、黄庭堅、晁補之、張耒と並んで蘇門四学士のひとりでした。肖像画も残っていますが、なかなかの美男子だったと思われる。蘇東坡の妹で美女の苏小妹と恋仲になり、恋の詩を交わしたのち結ばれたというストーリーの小説や戯曲もあるそうで、なかなか隅に置けないお方だったようです。しかし、中国の舞台演劇で知られている小妹との恋愛はどうやら史実ではなかったようですが…。

王安石が宰相になって新法運動を起こした時、秦観は反対派の蘇軾の側にいたため、何度も左遷の憂き目に遭っています。この当時、エリート官僚が赴任先や左遷先で宴会接待を受けることは珍しくありませんでした。宴会があると必ず妓女を呼んだことから、妓女との間に恋が芽生えることも多かったようです。

しかし、左遷が解かれ任地を去る時、当然二人には別れがやってきます。男性の方は大抵郷里に両親や妻子が待っているの、恋仲の妓女を連れて帰るわ

〈詞〉は元々妓女達がメロディー付きで歌っていたもので、それに文人たちが歌詞を充てはめることから始まりました。現在メロディーは、そのままの形では残っていません。歌詞と、それから楽譜の一部が残っ

jiǎn zì mù lán huā
減字木兰花
作者：秦観
qiū guān
tiān yá jiù hèn
天涯旧恨，
dú zì qī liáng rén bù wèn
独自凄凉人不问。
yù jiàn huí cháng
欲见回肠，
duàn jìn jīn lú xiǎo zhuàn xiāng
断尽金炉小篆香。
dài é cháng liǎn
黛蛾长敛，
rèn shì chūn fēng chuī bù zhǎn
任是春风吹不展。
kùn yī wēi lóu
困倚危楼，
guò jìn fēi hóng zì zì chóu
过尽飞鸿字字愁。

けにもいかず、多くの辛く悲しい別れの物語が生まれました。この詩は彼自身の経験もあるのかな、と思わせられるようなところもあります。

この詩は抒情詩なので、訓読の読み下し文にすると、元の詩の味わいがなくなってしまいます。植田先生の意識で味わってみましょう。

別離

別離の恨み果てしなく
問う人ぞ無き断腸の、
思ひ如何にと我が胸に
訊かば乱るる香炉の煙
我が眉は鬢めしままに、
東風吹けど展くに敢へず
高殿に物憂く寄りて見上ぐれば、
行く鴻は「愁」の文字にさも似たり。

男女の別れの気持ちを歌っていますが、どちらかと言うと女性の気持ちと思われます。

別れがこんなにも辛く悲しいのに誰も問い掛けて訊いてくれる人もいない。「断腸の思い」と言う言葉にもあるように、腸とは心の事です。「回腸」とは複雑に乱れた心を表わします。「小篆香」とは宋の時代、上流階級の女性の部屋で焚かれたお香のことで、篆字のような複雑な形をしています。お香から立ち上るもやもやした煙のような気持ち、あるいは、その燃え尽きた篆字のあとが灰になって残ったような気持ちを表現しています。今風に言えば「私、燃え尽きちゃったのね～」っていう感でしょうか。

後半はもろに悲痛な女心を描いています。「黛蛾」とは眉のこと。「斂」とは引きつった顔、と言うことです。たとえ柔らかな春風が吹いても悲しみにくれた私に笑顔は戻って来ない。

眉を鬢めた美女というイメージは、昔、越の国の美女西施が眉を鬢めた表情がなんとも美しく魅力的であったという故事からきています。高殿に登って風景を眺める行為は、男性なら、故郷や妻子を懐かしむ、女性なら、帰らぬ人を待つという固定したイメージを持ちます。

高殿から空に羽ばたく鴻の群れを見ていると、その様子があたかも「愁」という字に見える、というの

です。鴻は雁に似て雁よりも大きい渡り鳥のことで、ここでは雁と同じ意味に使われています。雁は遠くから便りを運んでくるという言葉の言い伝えが古くからあります。しかしその雁も便りを運んでくれることはない。空しくその群れを眺めているうちに、その姿から「愁」という字が思い起こされる。「去って行ってしまったあのお方も同じ寂しい気持ちでいてくれるのではないか」という女心も読み取れます。

「秦観は非常にモテたようですね。まあ、モテないところという詩を書けないですからねえ」と植田先生。相変わらず含蓄深い？先生のコメントに一同ニヤリと頷きました。この詩は、左遷先である妓女と懇ろになり、別れた経験があったことを匂わせています。「内容は恋の恨みつらみ、私達終わっちゃったのねという、どこか演歌やシャンソンっぽいのですが、秦観の作風は俗っぽくなく、上品なんですね」と、植田先生。

秦観は生涯このような正統派の抒情詩を作り続けました。〈詞〉はあまり日本では知られていないのですが、文学ジャンルの的には和歌や江戸小唄、というイメージで、女流作家も多いようです。蘇東坡は〈詞〉でも豪放派という男性らしい作品を残しましたが、秦観は繊細な女性っぽいスタイルの作風で知られており、〈詞〉においては男女間の機微を詠った作品を多く残しました。

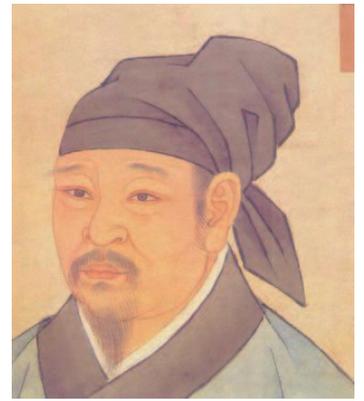
赴任先の一時の恋、男性にのめり込んでしまった挙句、捨てられ寂しさにくれる女性。古今東西ありうる恋物語ですね。

秋が深まっていく季節にはピッタリの作品ではないでしょうか。

■注

秦観(しんかん)：1049～1100年。揚州高郵(江蘇省高郵市)出身。中国・北宋の詩人・政治家。

(ウィキペディアより)



秦観(ウィキペディアより)

この連載で日本のエスペランティストを何人が紹介してきましたが、伊東三郎は私が警咳に接し、少しばかり親しくお付き合いをさせていただいたエスペラント界で名の知られた人としては初めての人です。

中央労働学院でエスペラントの講演会があると叔母が教えてくれ、叔母と共に出席して初めて伊東三郎の話を聞きました。参加者は50人もいたかどうか、小さい集会でした。その時の話の内容は忘れましたが、白髪で鼻筋が通った端正な顔立ち、「キリストも斯くや」かと思わせるような風貌でした。伊東については最後まで、その印象が消えません。

▶ 常に志が高く

私が1968年、ヨーロッパへ行こう、と思った時、伊東はわざわざ電話をかけてきて、自宅に来ないかと誘われました。本郷の東大の赤門付近のみすぼらしい木造アパートに伊東夫妻は住んでいました。このような木造アパートはもう取り壊されていることでしょう。経済的に潤ってはいないことが一目でわかりました。

「赤貧洗うがごとし」という言葉がぴったりくると言っても伊東を貶めることにはならないと思います。それよりも、金があろうがなかろうが、そんなことは人間の価値とは何ら関係はない。その人の持つ高い志と崇高な行動にこそ人間の価値があるのだ、と伊東から直接そのような言葉を聞いていませんが、その行動、風貌がそう言わせていたように私には思えます。事実、伊東はそういう浮世のしがらみから解放されていた人だった、と見えました。

その時の話の詳細は忘れましたが、エスペラントを盛り上げるために、なんらかの会を立ち上げよう、私の身の丈に合わないような壮大な話ではなかったか、と思います。伊東はしばしばそういう類の

話を絶えず話す人だったのでしょう。

伊東と親しい年下のある男が「総会屋みたいだな」と、ある会合で本人を前にしてそんなことを言ったことがありました。伊東はそんな言葉を聞いても馬耳東風と聞き流していました。それでもある時、いつも皮肉交じりに言う彼に対して、「お前は・・・」と怒ったことがあると聞いたことがあります。それもまた人間的な側面だったと思います。

▶ 一体それが何だ！

『高く たかく 遠くの方へ』という伊東の遺稿と追憶の書から伊東の姿を描写しましょう。「Vantajn vortojn for! 煙に巻かれないこと」と題されたエッセイはこんな内容です。

「世界大会へ行ってきた諸君のみやげ話が、たいていヨーロッパのエスペランティストがエスペラントを自由自在によくしゃべるという感嘆であることは深く一考を要する。ぼくは実際そんなに感心しなかった。エスペラントを自国語なみにべらべらしゃべっても、一体それが何だ。エスペラントの単語や文法が概してヨーロッパ風だから、それに安易に依りかかって、べらべらやっても、それが果たして本物といえるだろうか。ぼくはむしろヨーロッパ風でない世界観や言語感覚の問題をも、対置し、ヨーロッパ流の限界に注意を喚起し、世界に対する理解を要請した。

はじめ、かれらは日本人はしゃべるのがへただといったから、ぼくは東洋人の基本態度は無言で核心を伝達することで、しゃべるのは必要悪と心得ている、西洋人はさかんにしゃべるが、はたして核心の問題をどんなに心得ているかと反問すると、かれらは啞然とし嘆声を発し、話の主導権はこちらに移るのだった。

しゃべることが能ではない。問題は真剣に世界を

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」
第十七回 洗いさらした木綿のような人 伊東三郎
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類善啓(おもしろいよしひろ)

考えているか、どうかだ」

そして伊東はかつて、あるヨーロッパ人にこんな詩を送りました。エスペラントで書いたのですが、ここは小原孝夫訳で紹介しましょう。

「くこの生きているほんとうの花/よく観よ、なんとうつくしい/これが、われらの心をよろこばすものなら/ただ、やさしくほほえみかわそう/余計な言葉を捨てさって」

かれはにっこりとよろこんでくれた。

日本でも世界でも、煙に巻かれないで核心をつくエスペラント運動を進めようではないか」

➤ 老荘の徒

1932年9月から1933年5月頃に書かれた〈ある人の手紙〉という文章の中に、こんなことが書いてあります。

「僕は中学時代から、否小学時代から、儒教の色の染み込んだ修身や教訓に物足りなさや疑惑を感じて、老荘の道を好んで追及した。立身出世をせよとの大人の教えに疑問を抱いて、僕は百姓になるとか、肥取りになるとか、仙人になるとか言っては父や伯母を嘲弄して来た。それはもう子供のときからだ」

伊東の詩に、こんなのがあります。

「父よ/私は大学教授にもなりませんでしたし/博士にもなりませんでした/私は将軍でもなければ/提督でもありません/私には黄金もなければ/栄光もありません・・・」

高杉一郎の著作『中国の緑の星 — 長谷川テル反戦の生涯』には、高杉が中国の葉籟士というエスペランティストと1960年に街を歩いていた時、葉が突然、この詩句をエスペラントでそらんじたと記しています。葉は、高杉を振り向いて「あの詩人はまだ生きていますか?」と尋ねました。それは伊東のエスペラント詩集『VERDA PARMASO (緑葉集)』の巻頭を飾っている父への献辞でした。

高杉は「ええ、生きていますよ。戦後は、もっぱらエスペラント運動の宣伝家として働いているようです」と答えながら、この詩人の幸せを心から羨ん

だと書いています。

「彼がえらい政治家や金持ちや学者にならなかったとって、それがいったいなんだろう。私たちにとって思い出すことさえつらい日中戦争の十数年を越えて、ひとりの中国人の心のなかに『あの詩人』と、憎しみをもってではなく、なつかしさをもって生きつづけることのできた伊東三郎の光栄を、私は心の底から羨ましいと思ったのであった」と記しています。

こういう文章を読むと、私自身がささやかながら、伊東と交流があったことをとても良かったと思うと同時に、埴谷雄高との交流などを含めて、もっともっと聞きたかったことがあったのに、とも思いました。

➤ 洗いさらした木綿のような人

伊東はエスペラント界では有名でしたが、世間的にはほぼ無名のような存在だったと言えるでしょう。しかし伊東が亡くなった後、ささやかな追悼会が開かれ、また埴谷らも参加した『遺稿と追憶』の出版記念会だったかに参加したことを今改めて思いだし、伊東の高潔な人柄を思い出しています。

『遺稿と追憶』には多くの人たちが原稿を寄せています。そのすべてを紹介できませんが、大本教の幹部だった今は亡き伊藤栄蔵がこんな風に回想しています。

「伊東三郎という人は、稀に見る純粹人であった。こんな人を本当の詩人というのであろうか。もっとも、夢ばかり追っている理想主義者というのでなく、何とか現実化してゆこうとする意欲と才能も持っていた。(中略)『事業化』の才能はあったかも知れないが、世渡りは上手でなかった。私が出会った何回のうち、ただの一度も、懐中の豊かそうな伊東さんを見たことがない。痛々しいほどの清貧ぶりであるが、しかしそれを苦にした様子は少しもなく、洗いさらした木綿のような、慎ましく、さっぱりした人柄が出ていた。こんな人はエスペラント界ばかりでなく、一般社会にも沢山はいない。それだけに私は限りなくなつかしく慕わしいのである」

東西文明の比較 (18)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

前回に続いてアメリカ大陸の文明について述べてみたいと思います。

今では世界の食卓を飾る食料の原産地がアンデス産だということをご存じでしょうか？

トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、インゲンマメ、トウガラシ、ピーナッツなどです。

それらの野菜を食べながら、遠い日の出来事を想うことも一興ではないでしょうか。

アンデス文明の特異性

コスタ(海岸域)から内陸部に入ると、山岳地帯のシエラになります。そこはアンデ

ス山脈の東山系、西山系、中央山系の三地域に分けられます。これらの地域は標高差で気候風土が異なります。まず沿海部に近い標高500メートル付近でユンガと呼ばれる谷間が出現します。これらの谷の両側は急斜面の乾燥地帯ですが、谷底では耕作が可能です。バカイ¹⁾、グアバ、チェリモヤ²⁾、アボカド等の果樹の他に、サツマイモ、マニオク³⁾、トウガラシ、コカ等も栽培されます。

標高2300メートル以上になると、年間降水量は250～500ミリに増え、平均気温は11～15度と低くなります。この一帯はケチュアと呼ばれ



カラル遺跡

ます。現在ではペルーの大都市が点在しています。農作物は最も重要なトウモロコシと豆類が盛んです。標高3500～4000メートルになると、年間降水量は800ミリ、平均気温は1～7度と寒冷地です。高地性の根菜類やオウコ(ツルムラサキ科)、オカ(カタバミ科)などが栽培されます。

シエラを越えてアンデスの東斜面に出ると、その眼下にはアマゾン川源流のモンターニャが広がります。こうした自然環境にある中央アンデス地帯では、紀元前2500年頃から農業と牧畜が本格的になります。この時期を以てアンデス文明の「形成期」といいます。

文明の「形成期」は、一般的に下記のような定義をしてきました。

①農耕による定住

②祭祀建造物の出現

③土器の出現・・・の三要素をもって「形成期」としてきましたが、アンデスの場合は、それが該当しません。注目すべきは、農耕定住と祭祀建造物の出現がほぼ同時期に起っています。これがユーラシア大陸の諸文明と異なる事象です。

カラル遺跡

ペルーの首都リマの北約200キロ、中央海岸のスーペ谷にある巨大遺跡。前2600～2000年に存在しました。多くの祭祀用建造物が集中している区域は約60ヘクタールあり、1万5000人ほどが暮らしていたと言われています。ナポリ近郊のポンペイの城壁内の広さに匹敵します。代表的な建造物は、円形神殿と階段ピラミッドです。これ以外にも8基のピラミッドや円形神殿があります。前1800年以降に製造された土器や武器は出土していません。この時代には戦争や武力闘争などがなく、そのエネルギーはすべて祭祀施設の建設に費やされていたようです。

農業は高地から海岸へ

アンデス原産の野菜や果物は豊富です。トウモロコシ・ジャガイモ・サツマイモ・インゲンマメ・トウガラシ・ピーナッツが古くから栽培されました。これらの植物は、湿潤から先に栽培が始



コトシュ遺跡



クントゥル・ワシ遺跡

まり、後に乾燥した海岸地帯に広がりました。トゥモロコシは、高原では前5600年に出現していますが、海岸地帯では前1800年になって現れました。インゲンマメに至っては、高地で前8600～8000年に現れましたが、海岸地帯では前2500～1800年です。

コトシュ遺跡の「神殿更新」

東京大学古代アンデス文明調査団によって1960年代から調査された遺跡です。注目されるのは、9メートル四方の正方形の公共建造物が見つかったこと。壁は石を芯にした泥壁で、表面には上質の上塗りが施されています。壁の内側には大小の壁龕^{がん}があり、床の中央は一段低くなって、その中央に炉が切られています。さらに壁龕のある壁には手を組んだ姿のレリーフが2体見つかることから、この建造物は祭祀用の建物であることが判明。

この一帯からは土器類が出土していないことから、前2500年（先土器時代）に建造されたと言えます。

更に興味深いことは、一つの建造物全部または一部を壊した上でそれを封印するかのよう内部を大量の礫と土で埋め、その上に新たにほぼ同じ構造の建物を造っていることです。それも一定期間ごとに建物を建て直す「神殿更新」が行われています。

文明を語るとき、ユーラシア大陸の場合は、まず農耕定住が始まり土器の製造が起き、やがて余剰

農産物が生まれると宗教施設が出現します。ところがアンデスでは、余剰農産物の明確な備蓄施設も充分に見当たらず、土器すらなかった時代に、すでに宗教施設が生まれているのです。これは、従来の文明展開と真っ向から対立する展開です。

クントゥル・ワシ遺跡の1000年祭祀

この遺跡は、ペルー北部のアンデス山脈西斜面、標高2300メートルの山中にあります。四方を加工した巨石を積み上げた壁で囲まれています。平坦な頂上部は、幅100メートル、奥行き140メートルの基壇。そこに前1000年前後から石造建築の神殿が何度も建設され、約1000年半にわたって祭祀活動が営まれていました。その間4回の「神殿更新」が行われています。中央基壇の下からは墓が発見されており、黄金製の冠や鼻飾り・耳飾り等の装身具が出土しました。

マヤ族に伝わるトゥモロコシの神の像

最終氷河期が終わってから1万年前のある時期に、“一連の新しい食べ物が一連の新しい神々と共に出現”しました。中東では麦、中国ではキビと米、パプアニューギニアではタロ芋、アフリカではモロコシでした。そしてどこでも神々に関する物語が生まれました。死の神と再生の神、季節を巡らせ豊作をもたらす神々。そして信者たちが食べていた食品を象徴する神々。トゥモロコシの神は、中米から来た食べ物の神です。

マヤ族は、トゥモロコシから生まれ、その練り粉で作られたと信じられていました。古代メソアメ

リカの人々にとって、トウモロコシは儀式や礼拝時に捧ぐ対象となっており、これはマヤ族より以前のオルメカ文明にまで遡ります。

この神は、種をまき、収穫し、再び種をまくという農業周期の現実と、それに沿うように人間が生まれて死に、また生まれ変わるという周期への信仰の双方を表しています。しかし、それ以上に、この神は中米の人々の肉体を作る素材そのものだったのです。

私感ですが……………

文明の発展を考えると、「地域の交流」は欠かせないと考えてきました。しかし、アメリカ大陸の諸文明は、その「交流」がないまま、独自の発展を続けました。それらの文明から学ぶことが幾つかあります。そのひとつに「天文」があります。「天文」は、宗教やピラミッドのような巨大な建造物の「核」になっていました。このことは、長い間争いをしなかった事と関係がありそうです。

もうひとつは、「鉄の製法」を知らなかったことと、「紙」と「文字」を持たなかったことでしょう。日本の歴史と比べると、縄文時代草創期から江戸時代初期までの長きにわたって、外部と「交流」を持たずに独自の文化を築いた「アメリカ文明」が、16世紀になり、あっという間に西欧諸国によって破壊されてしまいました。

蛇足ながら、追記すれば、「古代アメリカ文明」についての研究が“薄い”のは、西欧諸国の侵略が明らかになることにためらいがあるのではないかと、ということです。今更ながら文明の発展には、他の地域との「交流」が重要であることを感じます。

(挿入写真はすべてGoogleパノラミオより)

■注

- 1) バカイ：栃の一種。
- 2) チェリモヤ：原産地は南アメリカのペルーやエクアドル。「森のアイスクリーム」とも呼ばれ世界3大美果木の一つ。
(ウィキペディアより)
- 3) マニオク：和名：キャッサバ。芋の澱粉がタピオカ粉

◆‘わんりい’活動報告

料理講座 ‘わんりい’秋の恒例、手作り月餅の会 参加者：16名

2017年9月23日(祝) 麻生市民館・料理室

講師：有為楠君代

今ではすっかり ‘わんりい’ の秋の定番料理講座になっている ‘手作り月餅の会’ だが、この月餅講習会が ‘わんりい’ の講座に登場したのはいつだったのか、ふと気になって ‘わんりい’ ホームページで、活動履歴を調べてみたら2009年9月だった。ということは、その前年の2008年秋、山西省の旅の途中の村で村人たちが集まって月餅作りをしているのを目撃、ご馳走に預かったのだ。

「え、月餅って手作りできるんですかぁ!？」と目から鱗だったが、その折、月餅の木型を頂いたのが、当時 ‘わんりい’ 会報に「媛媛講故事」のタイトルで中国の物語を紹介くださっていた山西省太原市出身の何媛媛さんに月餅作りをお願いした。何さんも当時は自分で月餅を作ったことがなかったそうだが、研究熱心な人柄で、人に訊いたりインターネットを検索されたり、ひと夏かけて試作を繰



月餅の皮の捏ね方・有為楠講師の実演

り返されてレシピを作り私たちに、月餅の作り方を教えてくださった。

その後、‘わんりい’ の有為楠さんが何さんに頂いたレシピを参考に、より美味しい手作りの月餅を目指し、材料の分量などを考慮して作り続け、餡を包む皮はどんどん薄くなり、ナッツの種類も増え、どこに出しても ‘美味しい’ といわれる ‘わん

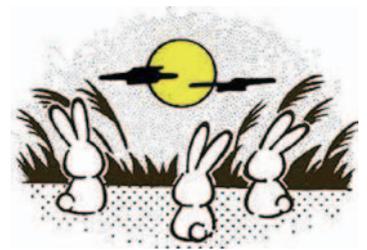
りい' 手作り月餅になった。

「町田発国際ボランティア祭・夢広場」で販売して好評だったが、保健所が手作りの食べ物の販売を認めなくなったので、講習会に参加する以外味わってもらえないのはとても残念だ。

というわけで、今年も 'わんりい' 会報で「月餅を手作りしたい人この指とまれ」の呼びかけをした。焼き立てでティータイムを楽しんでさらにお

土産として10個前後はお持ち帰りできるという、'わんりい' ならではの講習会で、参加者一同無心に月餅作りを楽しんだ一日だったが、練餡や何種類もナッツ類の大袋が贅沢に用意され、美味しさの秘密を知った。

(報告：田井)



餡を丸めて型に詰め成型・有為楠講師の実演



真剣な表情で餡の重さを量る参加者



型に入れて成型する前に、まず餡を皮で包んで団子を作る



餡を詰めて焼くばかりに成型された月餅 写真の中の特大のものは、プラスチック製のゼリー型で、月餅の型がない場合の一例として成型に使用したもの。型から抜くとその左隣の花形のようになる。



成型して並べられた月餅は、刷毛で卵汁が塗られる



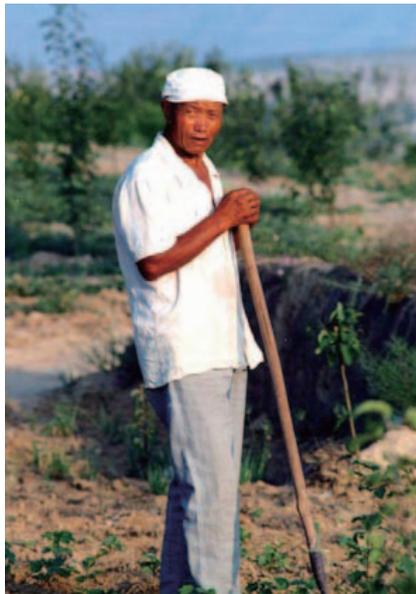
焼き上がり (1人分のお土産)

1951年、秋も深まった頃、高鳳蓮は結婚しました。婚家は、彼女の生家から十里ほど離れた文安駅郷白家塬村にありました。これは父母が決めた結婚で、相手は六男五女の末っ子でした。婚家は貧しく、一家のおじがかつて外地へ働きに出て、その地で亡くなった時も、遺骸を引き取りに行くことすらできませんでした。夫には兄弟姉妹が多く、水の少ない村の高台に住み始めたこの若い夫婦にとって、これからの生活がどんなに困難なものになるかは、十分に予想されることでした。

昔から、中国では「日照りの後の慈雨」、「異国で旧友との再会」、「新婚の夜」、「科挙に合格した時」を、人生での四つの喜びに数えて来ました。しかし、高鳳蓮の婚礼は、思い出したくないほどみじめなものでした。普通花嫁は籠に乗って輿入れするのですが、婚家は非常に貧乏でしたので、借りた籠は今にも壊れそうで行列の間中、ギシギシと鳴って不安な気持ちにさせられました。やっと白家に着くと、家の中にはオンドルがあり、オンドルの上に羊の毛皮が敷いて

ありました。穀物の収穫籠が二つ並べてあり、竈の傍には大きな水瓶が一つ置いてありました。新婚の夜は、花嫁が持参したものを見せて、いろいろ話し合うのが常ですが、新郎は話下手で、花嫁と殆ど口も利かず、何事もなく過ごしました。2, 3日すると、オンドルの上のあの羊の毛皮は、おばさんの

家から借りてきたもので、穀物収穫籠も三番目の姉の家から持ってきたものだったと分かりました。結局、新郎自身の持物は、大きな水瓶一つだけでした。



高鳳蓮の夫・白鳳楽

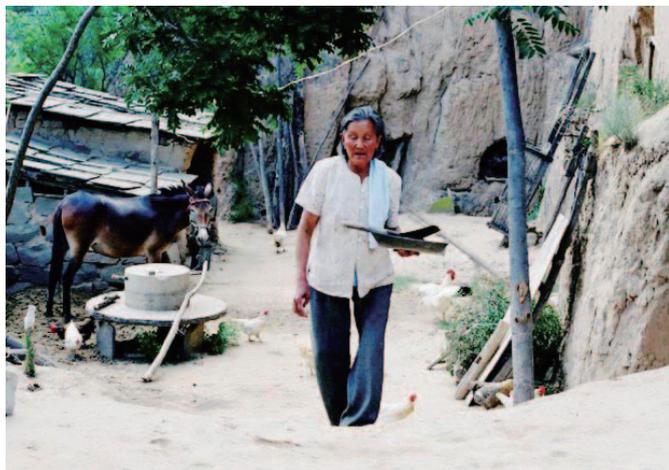


高鳳蓮の家族(夫の母を囲んで)

高鳳蓮の夫は、白鳳楽と言いま三歳年上です。とても善良で誠実な陝北男子ですが、普段は寡黙で、野良仕事や馬の世話などの仕事だけは良くできるというような人でした。それに引き換え、高鳳蓮の性格は全く反対で、一本気で、まめで、負けず嫌いで、何事にも一番にならないと気がすみませんでした。結婚した男性は、家庭を代表して表に出て体面を保つものですが、高鳳蓮の新家庭は、思いもよらなかったことに、家庭内の全てのことが彼女に任されたのでした。

新しく家に入った嫁が、家の内外のこと全て、家事全般、炊事や水くみ、老人の世話など、季節を問わず朝から晩まで全力を尽くしました。そしてこの努力は、三十年後、見事に報われました。高鳳蓮夫婦は三男三女の子供たちを育て上げ、しかも何のコネもないのに、三人の息子は都会に出て、公務員になりました。三人の娘は皆、然るべき家に嫁がせました。高鳳蓮は、高家の運気を白家に持ち込みましたが、白家の六人兄弟の中で、この恩恵にあずかったのは、夫の白鳳楽だけでした。

20世紀の60～70年代は、生活が苦しくて、高



終日忙しく立ち働く高鳳蓮

鳳蓮の目は、剪紙の方に向きませんでした。日中は、6人の子供を養うのに忙しく、子供たちの布靴を作るのさえ、夜中に皆が寝静まってから始めました。当時、政府の施策は現地の実情に合わず、人びとは積極的に仕事をしようとはせず、加えて、天候不順で作物の作柄もあまり良くありませんでした。しかし、家にはおなかをすかせた子供たちが6人もいて、春になる前に、家の食糧は尽きてしまいました。高鳳蓮の責任は益々重くなり、子供たちの世話の他に姑の世話もしなければなりません。

彼女は隣人たちに、トウモロコシを少しずつ借り歩きました。毎日のことで、借りられなくなると、村の外へ、物乞いに出かけました。誰も好んで物乞いなどしたくありませんが、子供が飢えて死にそうなときですからメンツなど構ってられません。幸い、高鳳蓮には知り合いが多数おり、周りの人たちは彼女の家の様子を知っていて、常家で一碗、張家で一升と出かける度にいくらかの食糧を得ることが出来て、何日かは凌ぐことが出来ました。村から十里四方の村々で、高鳳蓮が食糧を恵んでもらうために訪れない村はありませんでした。当時を振り返って、彼女は、「食糧を乞い歩くほど、面目ないことはありません。あの時の様子・気持ちは一生忘れられません」と言います。

食糧を乞い歩くことも長くは続きませんでした。その年は、どの家も食糧が不足して、高鳳蓮に分け与えることも出来なくなり、彼女は仕方なく、村

の男たちと一緒に黄河を渡り、山西省にトウモロコシを買いに出かけました。当時、山西省のトウモロコシは周辺と比べると半値ほどで購入でき、一家にとってはずいぶん助かりました。しかし、一袋50kg以上のトウモロコシの袋を、担いで岸から船に積み込み、黄河を渡り終わると再び船から担いで岸にあげるのです。十数袋のトウモロコシを一つ一つこうして運ぶのですから、大の男でさえ骨がきしむほどの重労働ですが、これを女の身で行いました。

春先の黄河は、上流の山からの雪解け水を集めていますから、ちょっとした不注意で船がひっくり返り、黄河の滔々たる流れに呑み込まれてしまうこともあります。

しかし、山西省のトウモロコシが周辺と同じように値上がりしてしまいました。すると今度は家畜のブローカーを始めました。これは厳密には法に触れるので、人目を忍ばなければなりません。高鳳蓮は日中休みなく働き、生産隊の仕事をこなして労働点数を上げ、夜暗くなってから、知り合いに会わないようにひっそりと家を出るのです。一晩中歩いて、夜明けに隣県の家畜市場に到着し、良い家畜を選んで安い値段で買い付け、ほとんど休まないで、やって来た道に戻ります。靴は破れ、足が腫れてくることもあり、買った家畜が歩くのを嫌がることもありましたが、高鳳蓮としてはどうしても夜明けまでに市に到着し、家畜を売って利益を得なければなりません。

高鳳蓮は、家畜が上手く売れても、温かい麺を食べるお金を惜しんで、食堂で麺のゆで汁を分けてもらい、持参の硬い餅(小麦粉を練って、油で焼いたもの)を食べて、自分自身を労うのでした。家畜を売った利益でトウモロコシを買って帰り、おからや榆の木皮、綿の種などを混ぜて餅にして食べました。

「美味しいとは言えないけれど、たっぷり食べられる方を選びましたよ。今は毎日白い粉を食べ、ト

ウモロコシは家畜の餌にしているけれどね」。高鳳蓮は、深い感慨に浸りながらこの話を語り今の生活に感謝するのでした。

夫が、生産隊に従って外地へ出稼ぎに行くようになり、子供がまだ小さいので心の慰めを剪紙に求めるようになりました。深夜、皆が寝静まってから、陝北民歌の歌詞にあるようにオンドルの上に灯した灯りで、花や鳥、魚や草など子供時代に剪ったことのあるものを剪っては、追憶にふけりました。多産を象徴する石榴・抓髻娃娃(髪を結んだ女の子)などの後世に伝えたい絵柄や、門神、竈の神などの家庭の安寧と発展を祈る図柄など、思い出されるままに次々と剪り出しました。

20世紀60年代中頃、村は飢饉に見舞われましたが、この困難な時期、高鳳蓮は進んで村のリーダーとして働き、村の党書記、婦人部長などを引受け、防災や耕地の整備などに村民と一緒に取り組み、成果を上げて、村民から信頼され、敬愛されるようになりました。

黄土高原に住む人びとにとって、誇りを失わないことは大事なことです。自分たちの生活を向上させようという要求はあまりありません。住居に関して言えば、南方の村落では古くからの住宅が残っており、黄河対岸の山西省の土地にも古い邸宅が至る所にあります。同じ黄土高原でも、延川より少し北の綏徳県や隣接する米脂県などには、堅牢で美しい石造りの窑洞があって遺産として子孫に残すことが出来るものがあります。しかしな

が延川地域一帯の黄土は地盤が脆い為、深い溝が無数に刻まれ、窑洞の建築資材も粗末なので、一生住み続けることが出来ない場合が少なくありません。この地域では崩れて住めなくなった窑洞が崖のあちこちに打ち捨てられたままになっているのです。

高鳳蓮は、剪紙で美しさを追求する努力を惜しみませんでした。貧困のために生活環境を整えるためにお金を費やすことができず3回の窑洞崩落事故を体験しています。一度目は、古い窑洞で生活していた頃、雨後に窑洞の前の部分が崩れ落ちました。幸い怪我はしませんでした。そこには住めなくなり、移り住んだ生産隊所有の窑洞も長年修理をしておらずいつ崩れてもおかしくない状況でした。

そんな状況から新しく窑洞を掘ろうと決心した高鳳蓮は、昼間は生産隊で仕事をし、夜帰宅すると窑洞掘りを始めました。夫が穴を削り、彼女がその土を運び出すのです。そのうちに灯油が買えなくなり、暗闇の中で仕事をしました。二輪車が無いので、木製の一輪車で土を運び出し、3か月かけて自分たちの窑洞を完成させ、子供たちと一緒に暮らせるようになりました。

その後、子供たちは育ち、窑洞が山陰にあるので陽光が当たらず、風水にも影響があるので、彼女は再度、日の当たるところに3つ穴の窑洞を掘る決心をしました。この頃には、子供たちは皆大きくなり作業の手助けが出来るようになりました。夫が



1968年 県の婦人部交流会



高家がある白家村周辺は人々のお腹を満たせない痩せ地だ



高家があった山間



自分で植えて育てたリンゴを収穫する高鳳蓮

崩れた土砂に巻き込まれて、病院に運ばれたこともありましたが、幸いなことに肋骨にひびが入っただけで済みました。正に、神仏に守られていると強く感じる出来事でした。

高鳳蓮は言います。

「他人によっては、一生かかって貯めたお金でも家一軒買うことが出来ない人もいるのに、私のような農民が一生に三度も窑洞を掘ったなんて、かなり良くやった方でしょう」。

過去の事故を教訓に高鳳蓮は石の窑洞を造る決心をしました。子供たちはすでに成長し、働きに出ているものもいました。子供たちの内、経済力のある者はお金を出し、力のある者は労力を出し合って一年半かけて、とうとう村の最高の場所に、三穴の、広くて快適な石造りの窑洞を完成させました。これで、家が崩れる心配をすることもなく、安心して暮らせるようになりました。これは村で最初の石造りの窑洞で、以後、村の人達は皆石造りの窑洞を造り始めました。高鳳蓮は、いつも村人たちのお手本でした。

高鳳蓮は、字が読めませんが、生活万端にわたる思考能力は非常に優れています。高家の畑の作物は、他の家のものとは比べて成長が速く良い実を付けます。リンゴを育てれば、他の家のものとは比べて甘い実が

沢山なります。スイカを育てれば、他の家のものより大きくなります。字は読めなくても、普段から耳でよく聞き、頭を働かせて工夫を重ね、効果が上がることを実行します。例えば、スイカの雄花の芯を雌花の芯に押し付けて、直接受粉させることで、受粉率を大幅に高めました。これは剪紙の図案「扣碗」^{kòu wǎn}注にヒントを得たものでした。この「扣碗」は、「龍と鳳凰」、「魚と蓮」、「蝶と花」など、世の中で相対するものを合わせることで、バランスを取る中国的な思想(陰陽思想)を反映しています。

この他、一つの株に異なる花を咲かせる剪紙の図案から、高鳳蓮は果樹に接ぎ木をしてリンゴやナシを実らせました。乾燥に強い酸っぱい棗に丸い棗の木を接ぎ木して、大きくて甘い棗を実らせました。農業上のハイテクともいえる技術を、字

が読めない農村女性が実際に行うことをだれが想像できるでしょう。スイカの受粉も、高鳳蓮は夫と共に何回も実験を繰り返し、早朝、露があるうちに行うのが最も効果的であることを探り出しました。「何事も頭を働かさなければ…」と言うのが、彼女の信念なのです。



高鳳蓮が剪った「扣碗」
kouwan

■注

扣碗：'蓋付きの椀'をいうが、剪紙の図柄では蓋は男性(陽)を表し、容器は女性(陰)を表す。

周路先生のこと、陝北黄土高原のこと、そして高鳳蓮の剪紙のこと
「黄土高原に咲く、目にも彩なる花々・剪紙」(周路著 / 有為楠君代訳) に寄せて

田井光枝

7月号の‘わんりい’より、有為楠君代さんの訳で周路先生の「黄土高原に咲く、目にも彩なる花々・剪紙」が始まりました。第一回目に、周路先生の簡単な経歴を掲載しましたので目を通していただいた方もいらっしゃると思いますが、そこからは‘わんりい’とのかかわりは読み取れないかもしれませんね。

私が先生と知り合ったのは、会が発足したばかりの1992年の秋でした。先生は版画研究生として日本に招聘され、国際版画美術館のある町田市を選んで居を構えたところでした。当時、私は棟方志功の呼び掛けで結成された日本版画院の会員だったこともあって、同じ版画制作を目指す者同士すぐに意気投合して仲良くなりました。以来25年の付き合いになります。当時の‘わんりい’の活動記録に先生の個展が何回か開催されたとあります。一緒に活動することで、先生と会のメンバーたちとの親交も深まってゆきました。付き合いが深まる中で先生の並々ならぬ陝北黄土高原への思いと先生の創作意欲を掻き立てる原動力の源がそこにあること知り、それならば「私たちもそこへ行ってみよう」と、1997年春、先生と共に会のメンバー9名が外国人への解放直後の当地を訪れました。

今、振り返ってもその旅は中国や中国人、否、人そのものへのイメージを塗り替える、いろいろな意味での衝撃の旅でした。

訪れた時期が真冬の春節の時期だった為、黄土高原は、ゴビの砂漠からの黄砂が300万年に渡って堆積したという、文字通りただ黄色い大地が無限に広がるだけのところでした。しかもその台地は、「いつでも人を呑み込む用意があるぞ」とばかりに深い谷状の地割があちこちにあります。優しさがまるでないように見えるこのような風土の中で人は生きてゆけるのでしょうか。真っ先に心によぎったのはそのようなものだったと思います。

しかし、黄土の小高い大地の上に立って、無限に広がる黄色いだけの四方を眺め渡し、真っ青な空の



黄土高原のど真ん中で叫ぶ 1997年2月

下の点になって両腕を天に向かって広げ、思いっきり大きな声で「お～い！」と叫んだ時の解放感と幸福感は今でも忘れられない感覚です。

また、合肥市群衆芸術館の学芸員だった先生が、来日する以前から陝北を訪れ、繰り返し紹介し続けていたこの地方の女性たちの民間芸術・剪紙の素晴らしさに圧倒されました。私たちが延川のホテルに到着した夜、「黄土高原に咲く、目にも彩なる花々・剪紙」の中心人物・高鳳蓮さんが自分の作品と剪紙の材料を持ってみえました。先生は、日本に滞在中、我が家に何度もお見えになりましたが、或る時、陝北の女性たちが剪ったり制作したりの剪紙や布堆画(アップリケ)を持ってみえました。その画集は先生自身が取材してまとめたものとのことで、陝北の民間芸術で話が弾みました。その折、是非、高鳳蓮さんたち剪紙作家の女性たちにも会いたいとお伝えしてあったのが早速に実現したのでした。

先生が携えてきた画集は、図柄こそ心魅かれるものでしたが印刷のために縮小されている上、紙質が悪く、色も美しいとはいえないものでした。しかし、目の前で高鳳蓮さんが下絵もなしに次々と剪り出してゆく、実物大の、自由奔放ともいえる独特の図柄は息をのむような緊張感が漲り、ただ目を見張って半ば呆然と眺めていました。細工が繊細であるとか丁寧であるとかではない、何か強い力で心を鷲掴みにされるような躍動感に体が震えるようでした。



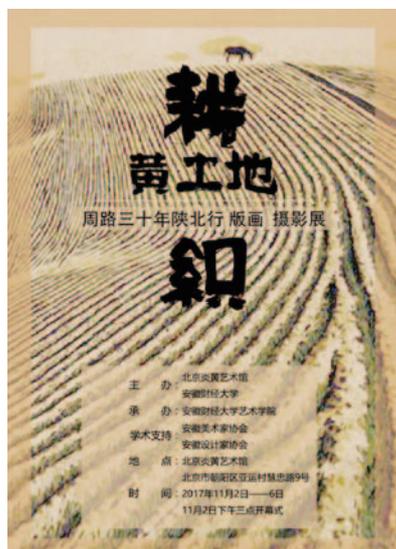
延川のホテルで高鳳蓮さんと 1997年2月

1989年の天安門事件以来、来日する中国の若者たちが増え、彼らによって、文化大革命から解放された中国の文化の面白さを知り刺激を受けた‘わんりい’の活動は「もっと中国を知ろう！」と活発に展

開されていたこともあって、「この感動を日本の人たちに紹介したい」との衝動が私をとらえ、同行のメンバーの一人であった岩田温子さんと共に高鳳蓮さんばかりでなく当地の他の女性たちの作品収集へと駆り立てられることになりました。

岩田温子さんと共に収集したこの地方の剪纸展は翌年、町田市国際版画美術館の市民展示室を借り切って展示しました。大手日刊紙初め当地のミニコミ誌などで取り上げられ、一週間ほどの会期中延べ700人を超す盛会で終わりました。

「黄土高原に咲く…」が、高鳳蓮さんの作品のバックボーンと魅力の源泉を私たちに伝えてくださることでしょう。どうぞご期待ください。



周路回顧展

「黄色い大地」～30年に亘る陝北黄土高原での撮影写真と版画展～

主催：芸術館/安徽财经大学

2017年11月2日～6日 9:30～16:30(初日15:00～)

場所：北京市炎黄艺术馆 北京市朝阳区垂杨柳村慧忠路9号

<http://yham.net/>

この展覧会では、黄土高原をテーマにした版画作品60点、写真60点の他、これまで出版された版画集と写真集が展示されるとのことです



耕织(布を織る) [写真]



雪中行 (108×80cm、2011年5月)



五月彩雲 (80×100cm、2010年3月)



无定河畔A (80×61cm、2010年11月)



葵花 (80×61cm、2009年)

◆わんりいの講座 **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

▲まちだ中央公民館 10：00～11：30

10月15日(日) 第3・4学習室

11月26日(日) 音楽室1

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)



▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

◆わんりいの講座 **ボイストレーニングをして
日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

●10月31日(火)10:00～11:30

町田市民フォーラム4F
学習室1(A・B)

●11月21日(火)10:00～11:30

まちだ中央公民館 視聴覚室

★動きやすい服装でご参加ください

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail:wanni@jcom.home.ne.jp(わんりい)



初心者のための体験のお誘い
【鶴川水墨画教室】

●講師：満柏(日中水墨協会・会長)

●場所：鶴川市民センター

(町田市大蔵町1981 駐車場有)

小田急線鶴川駅からバス

「鶴川市民センター入口」下車

●曜日・時間：14:00～16:00

毎月第2、第4(月)

●体験参加費：1000円

(見学無料/手ぶらで参加可)

●問合せ：野島

☎042-735-6135



葡萄 満柏画

■満柏プロフィール

1965年、中国の遼寧省生。祖父、母親は共に中国の著名な画家。中国の美術大学を卒業後、1988年、来日。日本の大学に入学し、日本文化思想など学ぶ。1996年から1999年、横浜市林光寺の天井画と障壁画を描く。1996年中国水墨画で「日本の自然を描く」展を開催。個展及びグループ展開催多数。水墨画・書の傍ら、美学芸術論を研究し、独自の美学論芸術論を唱えている。

- 日中水墨協会会長 ■中国水墨芸術家連盟常務理事
- 全日中展審査員 ■東京中国書画院常務理事 ■日本華僑華人文学芸術家連合会理事 ■「水墨之友」編集委員
- 美術大学非常勤講師。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又会の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、ご感想をお待ちしています。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

'わんりい'は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。また、新入会をいつでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引があります。お問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 'わんりい'

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい'わんりい'をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

(公財)日中友好会館&貴州省観光発展委員会 主催

第27回 中国文化之日

入場無料

多彩貴州「貴州少数民族歌舞公演」 前売り1,000円(全席指定)

- 日時:10月28日(土)11:00~/15:00~ 29日(日)11:00~/15:00~
全4回公演(30分前に開場、上演時間は1時間程度)
- 会場:日中友好会館地下1階大ホール

[e+イープラス]http://eplus.jp(PC/携帯共通)にて9月1日(金)より前売開始
ファミリーマートのチケット購入機でもチケットを購入可

■貴州少数民族衣装展・茅台酒の故郷—^{フォンシュエミン}馮学敏「貴州風情写真展」
会場:日中友好会館・美術館

10月14日(土)~29日(日) 10:00~17:00(27日14:00まで)



中国南西部に壮麗な大自然を有する貴州省は、少数民族が多く住む秘境です。少数民族の芸術は美しい自然環境での暮らしから生まれました。日々の暮らし、恋愛、伝説などをロマンティックに、独特な方法で表現しています。「多彩貴州」の公演は貴州省凱里学院音楽学院の学生が来日し、ミャオ族の民族歌舞や伝統楽器の演奏など多彩な演目で楽しめます。

展覧会は、貴州に暮らす少数民族の衣装や銀の飾り物などのほか、著名在日中国人写真家・馮学敏氏の貴州風情写真も展示。中国奥地の多彩な伝統文化をご堪能下さい。



「ミャオ族村へようこそ」馮学敏撮影

中日国交正常化45周年記念「情と形~四人のまなざし~美術展」

~武蔵野美術大学教授・水上泰財/在日中国人画家・武楽群&蔡国華/在日中国人彫刻家・含真治作品展~

中日芸術家それぞれの視線(まなざし)で、日常生活の瞬間や世界各地の自然景観を切り取り、まとめた芸術作品を展示

- 2017年10月2日~13日(金)(土日祝日休館) 10:30~17:30
(初日は15:30~/最終日は13:00)

- 中国文化センター(〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F) <https://www.ccctok.com/>
日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩5分 銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩7分

[主催] 美術展実行委員会、東京中国文化センター青島ビール、株式会社優文、武蔵野美術大学
[問合せ] ☎03-5628-5235 (情と形~四人のまなざし~美術展実行委員会)

入場無料



入場無料

‘わんりい’参加 全員集合!!

第20回 町田発国際ボランティア祭 2017夢広場

~ この星に平和と希望を ~

11月3日(祝) 10:00~16:00 於:まちなかの駅「ぽっぽ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている団体が集結の、エスニック気分溢れるお縁日です。

▶ 問合せ: ☎042-722-4260 町田国際交流センター

- 主催: 2016夢広場実行委員会 ●共催: (社福)町田市社会福祉協議会 / (一社)町田青年会議所

[10月定例会開催日及び11月号おたより発送予定日] ◆ 問合せ: ☎042-734-5100(わんりい)

- 10月の定例会: 9月15日(金) 13:30~ 三輪センター・第2・3会議室 (定例会はどなたでも参加できます)
- 11月号おたより発送日: 10月29日(日) 10:30~ ●場所: 三輪センター・第3会議室

※ おたより発送日はお弁当を持参ください。

世界の子供たちが描いた、表紙とも13枚多色刷りのとっても可愛いカレンダー

(公財) 日本国際連合協会 **世界児童画カレンダー 2018** (B3サイズ/36.4×51.5cm)

第19回カナガワビエンナーレ国際児童画展に応募の24,573点の入選作品の中から選ばれた国際色豊かな児童画 **1部1080円(税込・送料1本300円)** 11月中旬より発送になりますので、下記12月の‘わんりい’の活動に参加される皆様の分は、‘わんりい’事務局で取りまとめ購入申し込みをします。**申込期限：10月13日(金)**

(送料無料になります。但し、‘わんりい’からの送付はしません)

◆ ‘わんりい’ 12月活動予定：「2017まちカフェ」(場所：町田市役所/12月3日)、「漢詩の会」、「ボイス・トレ講座」、「中国語勉強会」など

▲ご自分で購入の皆さんは、(公財)日本国連協会へ直接お申し込みください。

☎03-622-6831 Fax 03-6228-6832



エレナ・ドブレヴァ 6歳 ブルガリア

「タイを知ろう！」 ～タイの民主化指導者であり、元タイ首相が相模原に住んでいた～

10月29日(日) 13:30～16:00

於：**プロミティふちのベビルB 会議室** (さがみはら国際交流ラウンジ JR 淵野辺駅南口 徒歩3)

<http://www.la.biglobe.ne.jp/sil/>

申込み不要 入場無料

●当日のプログラム

- ① **ピーブーン元首相とタイの今** … さがみはら国際交流協会 (SIA) 理事長・田所晋 (元ソニー タイ社長)
- ② **タイよもやま話** …………… 相模原市立大野南中学校校長・天野和広 (元バンコック日本人学校教諭)

タイは、現在、軍事政権下にありながら民主化に向けて努力を続けていますが、民主化は以前の金権政治に戻る不安があります。これまでタイ前国王が丸く治めておりましたが昨年崩御され、後を継いだ新国王にとってその任は重すぎるようです。80年前にクーデターで王制を民主政治に変えたピーブーン元首相は、晩年を相模原で過ごして逝去されました。その映画化の撮影が今年当地で行われました。何故相模原？ 死因は？ 観光案内でないその辺のお話を聞いて頂ければ幸いです。 (SIA 理事長・田所晋 / 講演者)



●問合せ：☎042-745-3247 SIA 事務局 ●主催：相模原国際交流協会

国際フェスティバル in 代々木公園

- **日本インドネシア市民友好フェスティバル2017**
10月14日(土) & 15日(日) 10:30～19:00
- **チャイナフェスティバル2017**
10月21日(土) & 22日(日) 10:00～19:00
四川省丹巴出身の歌手・アランが、チャイナフェスティバルで3年ぶりに来日無料公演
- **スペインフェスティバル2017**
11月18日(土)・19日(日)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。各位からいつもたくさんの切手をお届け頂いて感謝申し上げます。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

‘わんりい’ 227号の主な目次

「寺子屋・四字成語」 雑感(6)望梅止渴……………2
 論語断片(30)君子は多ならんや……………3
 大連・鞍山・本溪の旅(その3)……………4
 「漢詩の会」報告(15)減字木兰花・天涯旧恨(秦観)…6
 混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(17)…8
 東西文明の比較(18)……………10
 (料理の会・報告) 手作り月餅の会……………12
 高鳳蓮の生い立ち 陝北黄土高原の生活2 結婚…14
 周路先生、陝北黄土高原、高鳳蓮の剪紙のことなど…18
 周路先生の「展覧会」 紹介……………19
 ‘わんりい’ 掲示板……………20・21・22